研究通信

No. 17

1955年10月刊

村落社会研究会
編集部

東京都文京区本富士町、東京大学文学部社会学研究室

農村過剰人口の概念についてのノート

（東京）小池基之

労働人口の「過剰」がいわれる場合、それは、資本によつてつくられる労働力の需要に対する過剰として、はじめて問題とされるので、したがつて、それは資本制生産方法に特有なものというべきである。このような見地から、過剰人口の三つの形態――流動的・潜在的・停滞的過剰人口――が区別されているのである。

資本制的生産が農業におこなわれ、そこに機能する資本が蓄積されるにつれて、農村労働人口に対する需要は絶対的に減少するので、農村人口の一部はたえず都市プロレタリアートやマニュファクチュア的プロレタリアートに移行しようとする相対的過剰人口の源泉を形成することになるが、農村におけるこのような相対的過剰人口は潜在的過剰人口とよばれている。都市への、労働力の流動は農村におけるたえざる潜在的過剰人口の存在を前提とするのである。一方、農業賃労働者は普通小農民経済あるいは零細農民経済から供給されるのではない。

農家の労働力が賃労働として雇傭される場合でも、応々にしてその就業は不規則である。たとえば農繁期雇傭にしても、あるいは出仕事その他にしても、つねに、特定の雇傭主をもつている場合は、むしろ稀である。このようにして、これらの労働力はまた、停滞的過剰人口としての役割をはたす。

農村過剰人口は、このような二重の形態においてとらえらるべきであろう。共通過題！農村過剰人口の問題についての調査結果を整理するに当つて、基礎概念をめぐるいわば「感想」を記した次第である。

これ、農村過剰労働力はつねになんらかの形でこれらの経済と結びついている。これらの経済における小土地所有あるいは耕作は、賃労働との他による収入を補う手段であり、あるいは仕事がない場合、どうにか生活を維持していくための手段である。ここに、農村過剰人口が「潜在的」となる理由がある。そして、それがはつきりと目にみえるようになるのは、「その排水渠が例外的に広く開かれるとき」のみである。

したがつて、資本が農業を外からとらえ、小農民経済のなかでの資本の蓄積を阻碍しているというような場合には、資本の蓄積が阻碍されているということ自体が農村の人口を過剰ならしめる一つの要因として作用し、農村人口のかなりの部分を、いわゆる農村過剰人口―潜在的過剰人口たらしめずにはおかない。この場合には、小農民は事実上の賃労働者として、一方では資本制工業その他への賃労働のたえざる供給源となり、他方では低い生活水準と慢性的窮乏のもとにおかれているのである。このような、たえず都市プロレタリアートへの移行の源泉となつている、慢性的窮迫の状態のうちに、農村の潜在的過剰人口を把握すべきであろう。したがつて、「土地不足」は小農民経済における相対的・潜在的過剰人口の一つの表現であり、未墾地解放の要求――たとえば――はその解決のための一つの努力である。このような点から、地主制およびその残存のもとにおける農村過剰人口の解明への一つの通路がもとめられるであろう。「土地不足」はもはや農家人口に対する適正規模の創設といつた意味で解さるべきではない。

☆村落社会の研究と社会学

（金沢）井森陸平

社会学者だけではなく、経済、法律、歴史等の専攻者と共に、村落社会を研究する場合には、社会学者が単独で研究する場合に比べて、他の専門科学とは異つた社会学独自の考察観点といつたものの必要なことが一層痛感せられるので、このことについて私見の一端を述べさせて頂こうと思う。

これまでの二回に亘る共同課題研究発表を聴講した所からいつても、蓋し僭越なようであるが、必ずしも研究の観点や結果の上からみて、社会学特有のものが示されたとはいい得ないようである。その原因は、一つには実証的調査、サーヴェーをやれば、それで社会学だとする安易な考え方にあるように思われる。近頃のように、経済や法律の専攻者もサーヴェーをやり始めると、サーヴェーだけで

社会学を特徴づけることが出来なくなる。勿論こういつた研究は経済社会学、法社会学といえるとしても、これらの外に社会学プロパーがなければならない。そこで社会学プロパーの特質は何に求められるかが問題になる。それはサーヴェーだけではなく、サーヴェーと共にその前提としての社会学独自の概念、理論に求められねばならない。サーヴェーはこれが検証の手段たるに他ならない。昨年度の共同研究課題中の農民運動についてみても、サーヴェーをする前に農民運動、一般的には社会運動に関する社会学的概念、理論が明かにされねばならない。若しそうではなく、たゞ漫然とサーヴェーをする時には、他の専門科学の立場からの結果と対比して、特色のないものしか出ないことになる。尤も農民運動、社会運動の概念、理論についても、本当に社会学的といわれるものが存するかどうかが問題でもある。「プロレタリヤ社会主義」等にみえるゾンバートの社会運動の扱い方などに比べて、近刊の「社会運動」におけるヘバーレの概念や観点は一応社会学的であるといえるようである。こういつた社会運動の概念、理論が、戦後農地改革下の我が国農村という特殊の事情条件の下において、どの程度の妥当性をもつか、またどの程度現象の解明に役立ち得るかを確める方法として、サーヴェーが行われるものとみなければならない。

社会学的な概念や理論の構成の方面の仕事は困難であり、かつ成果も上りにくいというので、一応の結果の出るサーヴェーに向うという弊が、今日の村落社会の研究にないであろうか。社会学概念、理論の検証、展開は実証的調査研究に俟たねばならないが、しかしまた実証的な研究から真に社会学的な結果が生ずるためには、それは社会学的概念、理論から出発し、これによつて導かれる必要があるといわねばならない。

村落社会の研究において社会学独自のものがみられ難い今一つの原因は、諸専門社会科学の本来の主要研究対象からはづれた、何れの専門分野にも明瞭には属しない、いわば周辺的境界線的なものの研究が社会学であるとみる点にある。例えば今年度の共同研究課題たる農家人口と家族構成についてみても、これらは物価や金融等の如き純経済的のものではなく、また契約、所有権といつた純法律的のものでもなく、何れの専門領域にも明確には属しない、周辺的なものという意味で、一応社会学の研究対象とされるのであるが、しかし社会学だけではなく、経済学や法学の専攻の人々と一緒にこの同じ現象が研究せられる場合には、研究対象の面からは社会学の特色は現われず、また若し他の専門の人々が同じく実証的研究法による時には、研究方法上も社会学特有のものに認められないことになり、従つて単にこれだけでは到底社会学独自の研究成果は生じ難いことになる。社会学独自のものは、一応社会学的とみられる対象を取り扱うことだけに満足せず、これを社会学固有の概念、考察観点から研究することによつて初めて得られると考える。人口、家族、階級等周辺的現象の研究における社会学的考察観点とは何ぞやということが問題になるが、これが解決せられ、これを基礎とする実証的調査分析によつてのみ、社会学独自のものが得られると考える。

出発を前にして

人 本 哲 塚 (東京)

今年、昭和三十年は、私にとつて、大変な年になつてしまいました。本務が北海道にかわつただけではなく、入学会連合の奄美大島調査の幹事長という名の雑用係として五月から八月まで、前後二回、通算すると五十日程奄美大島に出ておりましたし、今度は、九月下旬から六ヶ月間の予定で南ブラジルの農村をみにいくことになりました。奄美大島の農業や農村については、すでにほかの先生方が御覧になつておられますので、しばらくおくとして、これから出かけるブラジル農村については、ほとんど未知であるだけに、大きな期待をもつております。最近米国やブラジルで公刊されたこの関係の報告をみたわけですが、今まで多少勉強したアメリカの農村の様子と似かよつた面も多く、他方、集団植民地のばあいは、とくに日本人のそれは、戦後における内地の開拓村ないしは、割合に新しい新開の村のような面もあり面白そうに思つています。短期間にそうわかるものではありませんので、今度の旅行では人口一万から三万ほどの都市を中心とする地域社会を一ヶ月ずつの予定で、三ヶ所ぐらいみてこようと思つています。小都市に住みついて、一ヶ月の間、その附近をぐるぐる廻れば、少しは見当がつくでしようし、これを三回くりかえせば、多少のことはわかるかも知れないと思つています。

札幌に着任して鈴木先生にお目にかかつた際、新しい農村地帯をみるには北海道は非常に面白い旨をうけたまわりましたが、北海道

をみる前に、南米の新しい農村をみてくることになりました。鈴木先生はじめ諸先生の御期待の万分の一にでもお応えしようと思っておりますので、幾分でも結果が出ましたならば、村研の皆様に御報告致すことに致します。

○転居

中谷和夫　和歌山県有田郡有田町小豆島七二三

原宏　八幡市折尾町則松中垣氏方

○入会

山本陽三　福岡市荒戸町三丁目二〇六

斎藤孝　東京都渋谷区穏田三ノ一七三

事務局は「まわりもち」で

（東京）一事務局員

村研も次三回大会を迎えるまでに成長しました。この会が、目的の一つに同学の研究者の親睦と交流を掲げている以上、私たちはその事務も、二、三の大学で専任の形で受持つのでなく、多少の不便、不都合はあつても、各大学で「まわりもち」にした方がよいと考えます。その方がマンネリを排除し、運営を健全化し、会への親密感を増すと思います。

正直な所、私たちは少し疲れました。ここらで解放されたいと希み乍ら、皆様に提案旁々おうかがいします。

村落社会研究会会則

A　名称　本会を村落社会研究会とする。

B　趣旨　本会は村落社会の研究について専門各分野の連繋を密にし、その研究の発展を期する。

C　事業

1　研究会

a　毎年共同の課題を定め、年一回課題研究に関する共同討論会を開く。

b　毎年の討論大会の際翌年度の課題を決定し、各自で調査研究又は適宜共同調査を行い、次年度の共同討論会において発表し、論議する。

c　共同討論大会以外に各地において調査し研究会を頻繁に開き、又各地会員の連絡を計り、研究活動をさかんにする。

2　出版

本会は機関誌として年報を出版する。これは主として討論会の成果を発表するが、その他に内外の研究業績の発表紹介批判等をものせる。又研究通信も発行して研究の推進に資する。

3　共同調査

会員相互の共同調査をも行うと共に海外の学者との連絡を密にし、併せて共同調査をも企てたい。

D　会員及会務

1　会員は村落社会研究に関心をもち、共同研究活動を希望する諸科学分野の研究者を以てする。

2　会員は三百円（入会金不要）

3　本会に事務局をおく。（当分東京教育大学社会学研究室におく。振替口座東京一三二八六番）

（附）1.毎年共同研究課題を定めて、共同討論の大会を開催する。

2.事務局は今年までのところでは、東京都文京区大塚窪町、東京教育大学社会学研究室に置いてきた、また「研究通信」編集部は同じく本郷、東京大学社会学研究室においてきた。しかし、将来は、会員の所属する各大学研究室の輪番担当とする。

3.事務局に事務委員若干名を置く。

4.通信連絡委員若干名を置き、「研究通信」を編集発行する。

5.年々の課題によつて課題委員若干名を置く。

6.課題委員を含めて若干名の年報委員を置き、年報の編集に当る。

3回大会プログラム
1955

村落社会研究会
第三回大会プログラム

日時、昭和三〇年一〇月一八日
場所、毎日新聞社大阪本社講堂
課題、「農家人口の変動と家族の構造」

◎午前の部（九・〇〇～一二・〇〇）

一、開会の辞　東京教育大学　有賀喜左衛門
一、挨拶　毎日新聞社人口問題調査会　三原　信一
一、報告その一（九・二〇～一〇・一〇）
　農家家族の構造と兼業
　福岡県立東筑西高校　原　宏
　質疑応答（一〇・一〇～一〇・二〇）
一、報告その二（一〇・二〇～一一・一〇）
　開発山村の家族人口
　富山県東礪波郡平村の場合
　大阪市立大学　中島龍太郎
　質疑応答（一一・一〇～一一・二〇）
一、報告その三（一一・二〇～一二・一〇）
　農業生産力と農村過剰人口
　福島県東白川郡一農村における調査事例について
　慶応大学　小池　基之
　質疑応答（一二・一〇～一二・二〇）

休憩、各自昼食（一二・二〇～一・〇〇）

一、報告その四（一・〇〇～一・五〇）
　農家の人口移動と家
　農林省農業綜合研究所　並木　正吉
　質疑応答（一・五〇～二・〇〇）
　共同討議（二・〇〇～五・〇〇）
　司会

――会場変更――（五・〇〇～五・三〇）
場所、大阪中央公会堂地下食堂（徒歩一五分）
協議会（五・三〇～六・〇〇）
懇談会（夕食）（六・〇〇～八・〇〇）

§お知らせ§

本研究会第三回大会は、下記プログラムにしたがつて開催されますが、大会開催地々元の御要望によつて、皆様方に同封ハガキによる出席可否の御予定をうけたまわつておくことに致しました。御手数でも必ず御返信下さい。

1. 大会に参加（参加費五〇円）する・しない
2. 総会・懇親会に参加（参加費一五〇円・夕食附）する・しない
3. 宿舎（一泊二食五〇〇円程度）の要・不要
4. 御芳名・御住所・御所属の機関名

右文面御記入の上、至急御発送下さい。一〇月一〇日必着のようお願い致します。宛先は「大阪市西区靱中通二ノ二七　大阪市立大学文学会内　山本　登　氏宛　電話　土佐堀(44)〇〇六七・四八八五」です。

記

△夏の調査旅行をおえて、息つくひまなく、集計やら雑用やらに追われているうちに、もう大会シーズンになつてしまいました。今年こそは「研究通信編集部」の移管を目指して準備工作にかかつております。それでなくても弱体な上に、編集メンバーの数が減つてもはや事務負担に耐えられそうにありません。なにとぞ現状を御推察の上、御協力下さい。
△年報第二輯発刊になりました。社会学会大会・村研大会の会場におもち致します。
△返信用ハガキはお忘れなく。（Q）

❀　❀

東京都中央区鍛冶町1の10　内外印刷孔版タイプ部内　電(67) 3328-3339